

特集

あの日の

Dr. マハティール

先月号の冒頭でお伝えした通り、まさにこの原稿を書いている今日（3月22日）、東京では桜の開花宣言が発表された。

我々の事務所から徒歩1分の場所には青山墓地があり、桜の季節は何ともいえない絶景になるが、写真の桜のアーケードを潜るのは実に幸せな気分になる。是非、お立ち寄り頂きたい。



近々セルドロン事業について、立て続けにご報告させて頂くことがあるのだが、この原稿を書いている今現在は、残念ながらもいずれもそのタイミングではなく、グッと我慢しているところであり、次回以降にご期待下さい。

という事で今回はセルドロンには全く関係ないことを書かせて頂くが、なんと「リスク」について。少々フラストレーション溜まり過ぎていたのか、どうもこういう話題を書きたくなくなりました。

1995年から2008年まで私はマレーシアに住んでおり、マレーシアの高度成長期を体感させて貰ったが、それを先導したのがマハティール元首相である。

マハティール元首相は大の親日家というより、冷静に日本を評価している方で、戦後急速に復興を遂げ、経済大国となった日本をお手本とした「Look East 政策（東を見なさい）」を掲げて、日本を見習いなさい」を掲げて、自らの国を高度成長させた人物である。

1998年におきたアジア通貨危機においては、当時のマハティール首相がジョージ・ソロスを目の敵にした発言をすればするほど為替レートが暴落し、輸入に従事していた私は「お願いだからしゃべらないでくれ」と本気で願っていた。

マハティール元首相はソロスをはじめとした欧米式金融工学が根底にあるやり方に対して「小国である東南アジアの国々の通貨を投機目的で利用するのはけしからん」「IMF主導の金融政策など小国には不向きである」と主張を続けたうえ、為替固定相場制を選択したのである。それはもう衝撃の瞬間であった。

マレーシアに滞在する、ほぼ全ての日本人がバニックに近い状態に陥り「もうこれで、マレーシアは終わった」「世界経済から取り残された」と感情的な発言が横行したものである。

マレーシアという国はベースに「産油国」という肩書があつて、とても裕福な国であり、例えこの金融政策が原因で国際社会から孤立したとしても、サバイバルする自信はあつたのかも知れないが、彼はその時、自分のポリシーに則り、そして国の未来を考え抜いたうえで果敢にリスクをとつたのだ。

それから3ヶ月ぐらいすると「うん？為替が固定されてるって楽だったりする？」「為替が暴落して調達コストが大幅に上がった資材は、固定相場にあわせて値上げすればいいじゃん？輸出企業は暴落したおかげで儲かっているんだから値上げ要請受けるはず」・・・「マハティールさん、ありがとう！」と180度転換しての評判に変わっていった。

その後、世界中がマハティール元首相の英断を讃えるコメントを寄せられるようになったことはご存知の方も多いと思われる。マハティール元首相にどれだけのブレインがいたのかは知らない。当時、マハティールの後継者と呼ばれた副首相は、IMF方式に傾注したためラインから外された（後日、同性愛者として逮捕、というのが東南アジアっぽい）が、最終的な決断はマハティール元首相自身が下

したと私は信じている。彼は欧米主導ではなく、独自のポリシーに沿って決断し、その決断にはリスクが付きまとう事を承知の上で実行したのである。

私が14年間のマレーシア生活を終え、日本に帰国する前日、嘘みたいな話であるが、クアラルンプールのショッピングモールで偶然にもマハティール元首相にお会いすることが出来た。勿論、バツタリであり、彼は数名のSPと共に彼がオーナーのパン屋を訪問する途中であった。「後光が差している」とはまさにあの時の光景で、座っていた私は立ち上がり、直立不動で通り過ぎる彼を真横で見送った。あの時の彼の顔は今でも鮮明に覚えている。イメージがそうさせているのかも知れないが、微笑んでいて、目がとても優しくかった。セルドロンのようなベンチャービジネスをやらせて頂いていると、毎日、そしてどれもがリスクである。もっともリスクが無くなった時点でそれはもうベンチャーとは言えなくなるわけで、当たり前のことなのであろう。

コンプライアンスやガバナンスは必要な物で、ビジネスをやるからにはリスクは取らなければいけない物。そんなことを自分に言い聞かせつつ、たまにあの日のマハティールさんの顔を思い浮かべ「リスクを取れ。そしてやり抜け」と言われているような気になつてはならない。今日この頃である。

TOPICS 1

浚渫工事現場を勝手に見学2

前号では、浚渫のために特殊な重機が運び込まれたところまでお伝えしました。今回はその続編です。

浚渫工程の見学に行った。(浚渫土の積みみは見れず、聞いた話。。。)
浚渫土は、コンテナを積んだトラックで処分場まで運搬し、この現場で利用した処分場は成田近辺まで運ばれました。



近辺の処分場は、断られるケースが多かったそうです。

時期的に汚泥が多く発生することも考えられますが、東京の汚泥処分場が少ないことも要因の一つです。一日2往復、2台から4台トラックを準備し、浚渫土を運び出したそうです。特殊な車で、一回4〜5mの運搬、処分場まで往復3時間。一日40m程度の浚渫土しか処理できないのは、効率が非常に悪いと思います。

一つの案として、セルドロンを利用して平車のトラック等で運んだほうが効率がよく運び出せます。都内の現場では、このように処分場の問題が多く発生しているのです、ぜひお声をかけていただきたいです。また、場内では浚渫した後、に重機をいれて作業工程があるため、一部の浚渫土を積み上げ、乾燥曝気させていました。この乾燥曝気の作業は、スペースや天候など様々な条件が必要で、やはり、このような現場にもセルドロン！



何度か提案をさせていただいており、乾燥曝気がうまくいかないようであれば、セルドロンの使用になるだろうと思われれます。そして、あの特殊なバックホウを運び出すためには、また水を張って浮かばせてから解体する必要があるそうです。

乾燥曝気させている部分に

TOPICS 2

セルドロンの残コン用途



も、水を張ったためまた水分が含まれてました。

セルドロン納品の模様

次号では、セルドロン改質をお伝えできればと思います。

セルドロンの使い方は、泥だけではありません。特許も取得した通り、「個液混合物の流動性低下」ができるセルドロンは、余った生コンクリートにも最適です。

様々な試験を実施しており、やっと「ZEMIS申請」をさせていただきました。今後は、国交省等とのやり取りが半年程度続いて、正式に登録が完了すると見込

んでおります。

また、残コン解決の商材であった、「ゼロコン」が販売を停止し、今まで「ゼロコン」を活用していた方からも、セルドロンの問い合わせが増えてきました。

ゼロコンの小林代表とも打合わせをさせていただいて、今後の戦略を立てております。

キム・ギョンの RAMCOONER 韓国の宅配事情

忙しい日常生活のため現代人にはなくてはならないのが「宅配サービス」です。宅配は基本的には韓国と日本同じですが少し違う所があります。

日本の宅配サービスは本人が欲しい時間を選択して、受けることができますが、韓国の宅配サービスは本人に配達する前に、宅配運転手さんが電話で何時頃配達するという連絡が通常です。

韓国の宅配サービスは不在のため受け取れなかった時は、日本みたいにご不在連絡票のようなシステムがありません。ですので不在の時は他の所に宅配を任せたり、宅配運転手さんに直接連絡するしか方法がないです。

韓国の宅配サービスは、早く受けることを重要に考えるので、受付から配達までを中心に発達した日本より問題点が多いです。

*原稿の原文そのままを掲載しております。